

アリの目印

1. ムラサキシジミの幼虫

春の芽出しも終わり植物の成長も一段落したところですが、2番芽の伸長も始まります。カシ類は新芽が紫色がかっていますし、若木や株元に新芽が発生しやすいので探すのにちょうど良い高さになっています。この柔らかい葉の部分にムラサキシジミの幼虫がいます。



紫色の新芽



ムラサキシジミの幼虫とアリ

シジミチョウの幼虫は「笹かまぼこ」のような平たい形で葉に同化しやすい色彩、体型し

ています。大まかな場所はわかっていても、じっとしていると見つけにくいのですが、周りにはアリがいますからこれを目標にします。人にとって動くものは認識しやすく、アリを追っていくと幼虫を発見できます。

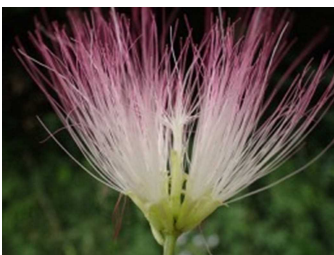
アリはムラサキシジミの幼虫が分泌する液体を舐めるために集まってくるのです。そして幼虫の捕食者を追い払います。そこで、幼虫とアリは互恵の関係にあると、かつては考えられていました。ところが、最近の研究で幼虫の分泌液には麻薬物質が含まれ、舐めたアリは脳内のドーパミン量が低下して帰巢しなくなり、アリが本来持っている攻撃行動は残り、必死に幼虫を外敵から守る結果になることがわかってきました。お互いに利益がある行動ではなく、アリは奴隷として支配されているそうです。



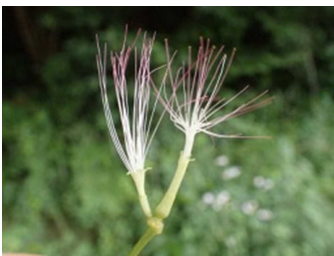
ムラサキシジミ

2. ネムノキの蜜

梅雨が明けるとネムノキの花が満開です。河岸沿いや河原に多く、日当たりと水分が必要です。マメ科でフジより薄くて小さい豆が実りますが、どうやって打吹山にきたのでしょうか。公園や遊歩道沿い、長谷寺や峠の展望台近くで見られます。大きな木がない場所でも若木がありますので、種子がきたのでしょうか。



ネムノキの集合花



右の花は雌しべがあり、長い筒の底に蜜がある。

枝の先端に無数の花が付き、下から順次咲きあがってきます。一つの花に見えるのは20くらいの花の集合です。先がピンクのたぐ

さんの糸は雄しべですが、この色が花卉の代わりにしています。マメ科は虫媒花ですので昆虫に存在を知らせているのです。花粉を運んだ代償は蜜ですが、どの花にもあるのではなく頂端の1・2個の根元の子房が膨れている花だけに存在します。周りの花は目立つための補助で、種子をつけるのは中心の花というしくみです。蜜のある花はアリが教えてくれます。

アゲハチョウが花に来ているところを見ますが、花粉運搬の主役は、飛びながら吸蜜する夜行性のスズメガだそうですが、それではピンク色の意味がありません。昼夜どちらに軸足を置いたネムノキの戦略でしょうか。人が甘さを感じる量の分泌があります。



ネムノキ